

## 生きる環境の変化

物書きには旅好きが多い。取材旅行ということもあるが、やはり非日常の世界で感性が触発されたり、ヒントが浮かんでくるということもあるに違いない。

現代でも椎名誠、沢木耕太郎、多和田葉子、坂東真砂子のように旅三昧の作家は枚挙に暇がない。しかし、坂東のようにタヒチ島に住まいまで移してしまった例も珍しい。

「ドライブの楽しみは、鶏の死骸を発見することだ。私の住むタヒチ島では、野生の鶏がたくさんいて、よく車に撥ねられて死んでいる。それを拾って、新鮮ならば食用に、傷んでいれば犬の餌にするのだ」(18.7.7 付日経夕刊) と、日本では考えられもしなかった心境変化を見せる。猫好きな坂東は都市生活に獣の死の違和感を感じてきたはずだったが、路上に猫の死骸を見ても胸を痛めることはなくなったという。

私にはこの鶏の無残な死に方というのがひどく気になった。かつてタクシーで台湾の田園地帯を走行中アヒルの群れに出会った。ドライバーは気にも留めず、そのまま群れの中へ突っ込んだが、一羽とてひき殺されたアヒルはいなかった。一方、バンコックからシンガポールまで 3,000 km をバスで走った時には、道路上に彷徨い出た野犬の狼狽ぶりが哀れだった。一週間走って路上に見た死骸は 13 匹。そのうち、2 匹はわがバスが殺してしまったものだ。動物とて環境の変化に対応できるものとそうでないものでは、生死が逆転する。環境の変化にうまく順応できたものにこそ、文明社会では生きる資格があるようだ。

かつて、破滅派作家檀一雄が「火宅の人」の執筆中に行き詰まり放浪の旅へ出て、ポルトガル大西洋岸の小さな町・サンタ・クルスで、1 年 4 ヶ月もの間癒しの生活を送った挙句、帰るや一気に残りを書き上げ、その 3 ヶ月後に慌しく世を去った。5 年前その辺鄙な町へ行ってみた。そこには確かに檀の心を開かせ、気持ちを和ませる穏やかな環境があった。

(近藤)